

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集：FXニュースレター

執筆担当：斎藤登美夫



◆◆◆ No.0800 ◆◆◆

24/07/31

【ユーロはパリ・オリンピック開催国通貨だが…】

直前に、フランス高速鉄道(TGV)を狙ったテロと思しき動きもあり、開催延期なども危ぶまれたパリ・オリンピックだが、予定通り 26 日に開幕している。30 日現在、日本は早くも金メダルを 7 個も獲得するなど、好スタートを切っていることは周知のとおりだが、今回の当レターではそんなオリンピックと為替市場の関係について調べてみた。

◎「オリンピック開催年、開催国の通貨高」―はすでに剥げ落ち

インターバンクディーラーなど専門家のあいだを中心に、「オリンピック開催年、開催国の通貨は堅調に推移する」―と指摘されることが多い。ある種の経験則、アノマリーとも言えそうで、過去に遡って調べてみても、確かにそうした傾向はうかがえる。

そして、今年の開催国であるフランスの通貨はユーロだが、対円ではドル/円などと同じように年明けをこままでの年間ボトムに右肩上がり。7 月半ばにかけ、実に 20 円を超える上昇をたどっていた(155.07 円⇒175.42 円)。つまり、経験則どおりの通貨高が進行していたといつて間違いはない。

ちなみに、「オリンピック開催国の通貨が上昇する」―という理由については、一応説明もつけられる。会場の建設などインフラ整備に巨額な資金が必要となるうえ、視聴するテレビなどの広告効果を受けた売り上げ大幅増加。さらに、コロナ禍もようやく明けた欧州域内はもちろん、それ以外の地域からの渡航者増による国内消費のアップも期待されることが大きいという。

しかし、オリンピック開催国と通貨の関係をさらによく調べてみると、開催国通貨高の「寿命」は意外に短い。

もう少し具体的に言えば、早ければオリンピックの開催前、あるいは開催から間もなくそうした動きは終了することも多いのだが、実は今年がまさにそれ。先で記したユーロ/円の高値 175.42 円を付けたのは今月 11 日。以降、かなりの角度の右肩下がりなたどっており、25 日には 164 円台まで早くも 10 円超の下落をたどっていた。

こうした傾向には「麦わら帽子は冬に買え」―といった相場格言が象徴するような、為替など金融市場が材料を先食いする傾向にあることが大きいとされている。そして、様々なオリンピック特需を市場が積極的に先食いの結果、肝心のオリンピック開催時には「噂で買って事実で売れ」―とばかりに、相場はすでに終盤もしくは終わっていることになる。

そして今年も、過去の経験則に沿っており決して例外ではなかったと言ってよいのかもしれない。

また、さらに一歩進める格好で話をすると、比較的最近のオリンピックは「開催国通貨が遅くとも閉会までに高値をつけ大きく下落するケースが目につく」―ことはさらに気掛かり。これは先で指摘した先食いの「オリンピック特需」が剥げ落ちたりするため、ある意味では当然の動きなのだが、過去の事例を見るとそれだけとは思えないほど大きな下落をたどる通貨も少なくはない。

たとえば、幾つか実例を挙げると、夏季ではなくいずれも冬季オリンピックになるが 2002 年のソルトレイク(米国、通貨は米ドル)、2006 年のトリノ(イタリア、同ユーロ)、2010 年のバンクーバー(カナダ、同加ドル)などはまさにそうした値動きをたどっていた。

いずれにしても、上記の話から言えることは、パリ・オリンピック開催国であるフランスの使用通貨であるユーロが、今後再び大きく買い込まれることは予想しにくいとも考えられる。

むしろ、前述したようにユーロ/円相場は言うところ、年明け以降だけで 20 円上昇したが、その後の下落は 10 円超とまだ半分程度だ。いわゆる 100%戻し、あるいはそれ以上の下げを達成するか否かは別にしても、まだまだ下げ余地を残している気がしないでもない。つまりユーロ高よりも、先々に向けたいま一段のユーロ安進行について、頭に入れておいた方が良いのではなかろうか。(了)



当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。
なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。



Copyright (C) fx-newsletter limited company All Rights Reserved



FX-newsletter